ISSN 0446-804X

人文論究

第91号

〈論　文〉

城丸章夫の1946年の教育学構想　遠藤芳信…(1)

技能実習から特定技能1号への移行の制約要因
—全道の監理団体・登録支援機関への調査結果からの考察—　孔麗…(17)

世界への気遣い——ハイデガーとアーレント——　後藤嘉也…(27)

カナダにおける都市在住イヌイットの社会・文化変化
—モントリオールを事例として—　岸上伸啓…(37)

蝦夷漢詩前史
—元禄期松前阿吽寺僧釈智潤と朝鮮漂流官人李志恒の詩的交流—
泊功…(一)

李志恒『漂舟録』にみえる植物名について　中村和之…(一一)

函館人文学会令和3年度年次大会研究発表報告

函館人文学会規約・編集規定・投稿要領

北海道教育大学
函館人文学会

2022・2

李志恒『漂舟録』にみえる植物名について

中村和之

はじめに

一六九六年（元禄九、粛宗二二）、北海道の北部にある礼文島に漂着した朝鮮王朝の下級官吏である李志恒（イチハン）の残した『漂舟録』は、一七世紀末の北海道についての貴重な記録である。ただし漢文で記されていることもあってか、この史料がアイヌ史や日本列島の北方史の分野で注目されるようになったのは、一九九四年に池内敏氏による日本語訳が発表されて以降である[1]。池内氏はその後論文を発表され[2]、それを受けて筆者も、『漂舟録』にみえるアイヌ語について考証論文を発表した[3]。その際、『漂舟録』に登場する尭老和那（yo-ro-hwa-na）という植物名についても検討したが、不明とせざるを得なかった。今回、この植物名について再考してみたい。

一．李志恒『漂舟録』が伝える漂流してから松前着までの顛末

李志恒『漂舟録』の記述に従って、漂流してから松前に着くまでの彼ら一行の動きを辿ってみよう。以下、池内敏氏の日本語訳から適宜要約して紹介する。

李志恒は、四月一三日に、東莱府から寧海に向かう目的で船に乗って出発した。浦ごとに停泊して、四月二八日に出航した後、乗っている船が流され、一二日間の漂流の後に「泰山」のような陸地が見えたので、そこに上陸した。山の中腹から上は雪がいっぱいに覆っており、人はみな黄色い衣を着て、黒い髪に長いひげであった。李志恒の一行には、釜山出身の金白善という倭語（日本語）ができる者がいたので、話しかけてみたが全く通じなかった。李志恒は、丘の上に立ってまわりを眺めてみたところ、陸地が東北側に見えたので、小さな海をひとつ越えてそこにたどり着いた。そこにも同じような人たちが住んでいた。土地を指して名を尋ねたところ、諸毛谷（je-mo-gok/jeo-mo-gok）と言った。そこから三〇里ほど移動したところで土地の名前を尋ねたら、占毛谷（jeom-mo-gok）と言われた。山すその高くなったところに登って眺めてみたところ、東南間に長い陸地が見え、山がそびえ立っていた。そこを指して尋ねたところ、至谷（ji-gok）と答えられた。距離を見積もってみたところ、三〇里ほどであったが、実際にはもっと遠かった。そこにたどり着いて地名を尋ねたところ、小有我（so-yu-a）だと言われた。

数日間そこにとどまり、尭老和那（yo-ro-hwa-na）という草の根を掘り、粥を作って食べた。この草の葉は芭蕉によく似ており、根は大根によく似ていた。また、自分たちの衣服を貂皮の服などと交易した。船を指さしながら、帰る道を聞いてみたところ、手で南方を示し、息を吹き出して風の意を示してから、마즈마이（ma-jeu-ma-i）と言った。そこで、東方にある陸地沿いに南下した。途中で出会った人に同じ問いをくり返したが、彼らは마지마이（ma-ji-ma-i）と言うばかりだった。二一日目に、海岸の高いところから手を振りながら呼ぶ人たちがいた。それは二人の倭人で、金白善とも少しはことばが通じた。

彼らは南村府（nam-chon-bu）の倭人で、金を採掘するためにそこへ来ているということであった。彼らは、白米・葉たばこ・醤油・塩をくれ、さらに緘封した手紙を渡してきた。手紙を開けてみたが、日本の文字だったので、内容はわからなかった。ただ、文章の下に、漢字で「松前人新谷十郎兵衛」と書いてあった。すぐに出発し、五〇里ばかり進んだところで停泊した。金白善に、紙に筆で倭語を書いて尋ねさせたところ、国号は蝦夷国、地名は溪西隅（gye-seo-u）だった。翌日、七、八〇里進んだところで上陸した。そこには倭人の頭目がいて、「私は松前奉行の者で、名は新谷十郎兵衛である」[4]という短い文章を書き示した。また、初めに停泊したのはどこかと聞かれたので、金白善に諸毛谷（je-mo-gok）という地名を発音させたところ、その倭人は「蝦夷地の果てである。ここからは二千里ほど遠ざかっており、松前からすると三千六百里ほどである」と答えた。また「あなた方が停泊したと聞いたところの外側には、また別に羯悪島（gal-ak-do/gal-o-do）[5]と呼ばれるところがある」とも言った。

七月一日に、新谷十郎兵衛の船に乗り、武田大兵衛・仙台六右衛門・秋田喜左衛門などとともに出発した。一行のなかには、蝦夷通事の高山間兵衛もいた。李志恒は、船のなかで蝦夷通事に漢字を書いて質問した。李志恒が「蝦夷が『마즈마이（ma-jeu-ma-i）』というのは何のことですか」と質問すると、高山は「松前のことです」と答えた。同じく「『앙그랍에（ang-geu-rab-e）』とは何ですか」と質問すると、「平安という意味です」と答えた。「『빌기의（bil-gi-ui）』は何ですか」と質問すると、「暖かい（優しい）という意味です」と答えた。「『악기（ak-gi）』とは何ですか」と質問すると、「水です」と答えた。「『아비（a-bi）』とは何ですか」と質問すると、「火です」という返答であった。四日進んだところで、逆風に遭い浦口に船を停めて留まった。連日逆風が吹くので、同じ所に留まったまま三日になった。翌日、海岸沿いに進んだ。三日過ぎてのちに、大きな海をひとつ越えて、あるところに到ったが、そこは石将浦（seok-jang-po）と呼ばれていた。その海は蝦夷国との分界となる海であった。七月一〇日甲子、南風が強く吹き、雨が降りしきった。十郎兵衛は、李志恒が悲しがっている様子を見て、金を出して美酒を買い求め慰めてくれた。日本語のできる金白善は、李志恒とは別の船に乗っており、お互いの様子について話を交わすことができない状態であった。同月二三日、松前府の北方百余里ほどの曳沙峙（ye-sa-chi）というところに到着し、三日留まった。ここから李志恒だけが轎に乗り、二六日、松前まで七〇里ほどのところに到った。二七日、松前まで一〇里ほどのところで食事をし、衣冠を端正にして松前府に入った。

以上が要約である。池内氏は登場する地名について、小有我（so-yu-a）を北海道北部の宗谷、마즈마이（ma-jeu-ma-i）ないし마지마이

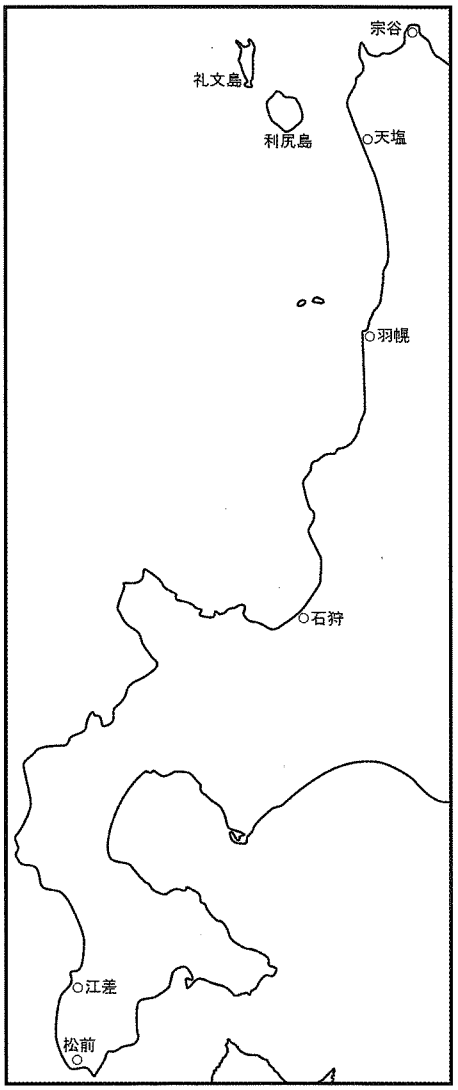

図１　関係地図

(ma-ji-ma-i) を北海道南西部の松前、松前の北方百余里ほどの曳沙峙（ye-sa-chi）を江差と考証している。従うべきであろう。池内氏とは別に、溪西隅（gye-seo-u）を天塩とする意見がある[6]。音の類似と地名の位置関係からの考証であろう。今後の検討が必要であろうが、宗谷と羽幌との位置関係からいえば、溪西隅を天塩とする説に矛盾はない。また筆者は、羯悪島（gal-ak-do/gal-o-do）をサハリン島（樺太）の旧称である「唐渡の島」「唐戸嶌」ないし「からと島」のことではないかとする考えを発表した[7]。また石将浦（seok-jang-po）については、位置関係から見て、石狩浦の誤記なのではないかとの推論を発表した[8]。

二、尭老和那（yo-ro-hwa-na）についての記述と疑問

李志恒一行が宗谷に滞在中の様子を、李志恒はつぎのように記している[9]。

空腹感がとてもひどくて歩くこともままならず、あちらこちらで座っては休んだ。そうしたときにちょうど路端に一軒の家があり、そこから煙気がさかんにのぼってきた。その家を訪ねて入ってみたところ、釜を火にかけて、ちょうど粥のようなものを作っているところだった。釜のなかのものを細かに見ると、わが国で田舎の人たちが食べる水麺のようだった。口を指してそれをちょっとくれと頼んだところ、一椀くれた。うけとって食べてみたところ、味は薏苡〔鳩麦〕のようだったが、穀物の粉で作ったものではなかった。食べても苦くなく、空腹感が癒された。材料を教えてほしいと頼んでみたところ、はたして草の根で、形がこどもの拳のようで、色は白く、葉は青かった。わが国では見られない草で、葉は芭蕉の葉とよく似ており、根は大根に似ていた。とくに変なにおいもなかった。草の名を問うたところ、尭老和那（요로화나〔ヨロファナ〕）だという。

このように、尭老和那は草で、葉が青く形が芭蕉に似ており、根が子どもの拳のようで白く、大根に似ていたという。この描写をすべて満たす植物は見あたらないが、食用になったことを考えるとオオウバユリであった可能性が高い（図2）[10]。あるいは澱粉の採取という点からみれば、カタクリの可能性もなくはないのだが、根がこどもの拳のようという記述から、たぶんこれは当たらないと考えられる。現代のアイヌの食事についての聞き取りを調べてみても、澱粉の採取と加工については、もっぱらオオウバユリのことを取りあげて説明している[11]。それによると、オオウバユリは本州中部地方以北、北海道、南千島、サハリン島に分布する。オオウバユリの澱粉採取については、旭川や静内などの例が紹介されている。またオオウバユリの収穫は、六月中旬から七月はじめにかけてオオウバユリの葉が枯れはじめたころとされて

図2　オオウバユリ（右側）、カタクリ（左側）

いる。

李志恒一行が宗谷に着いたのは五月一三日（西暦の六月一二日）、羽幌に着いたのは五月二〇日（西暦の六月一九日）である。六月中旬から七月はじめにかけてという、オオウバユリの収穫期と矛盾しない。

なお、カタクリである可能性についても検討をしておこう。カタクリを澱粉粥にしたという記述は確かにある[12]。また六月中ごろに収穫するともあるので[13]、尭老和那がカタクリであっても矛盾はない。ただアイヌの食生活の聞き取りによれば、カタクリはあえ物として食べる例が報告されており、粥として食べることは一般的ではなかったと考えられる。したがって、尭老和那はやはりオオウバユリと考えるべきである。

だが、尭老和那（yo-ro-hwa-na）がオオウバユリだとすると、別の問題が生じてしまう。オオウバユリはアイヌ語ではturepといい[14]、yo-ro-hwa-na とは音がかけ離れている。またカタクリだったとしても、カタクリはアイヌ語では、地下茎の呼び名がeskerimrim、花の呼び名がhure-epuyである[15]。これもまたyo-ro-hwa-naとは似ていない。このように、尭老和那（yo-ro-hwa-na）はおそらくはオオウバユリだと思われるのだが、李志恒が記録した植物名とは対応しないのである。

三、サハリン島でのオオウバユリの利用

尭老和那（yo-ro-hwa-na）ということばが聞き取られたのは、北海道の北端の宗谷である。このことから、サハリン（カラフト）アイヌやニヴフなど、サハリン島の先住民族の食文化がこのことばに影響を及ぼしている可能性についても検討してみよう。まずサハリンアイヌについては、「八月後半にはクロユリ、八月下旬から九月にかけては、キウKiwと呼ばれるオオウバユリの塊茎を採る。」[16]とある。ユリ根がキウと呼ばれており、ユリの採取の記載はあるものの、粥にしていたかなどの調理法まではわからなかった。

つぎにニヴフについての記述を調べてみよう。一九二六年から一九二八年まで現地に滞在して、ニヴフの人たちの生活と文化を記録したクレイノヴィチによれば[17]、

根菜　根菜のうちニヴフ族が食用にするのはクァルク―ユリ根、ヌォルクとチイルフ―ある種の植物の球根、トゥクス―ある種の植物の長くて甘い根である。ユリ根はニヴフ族が到るところで食用にしている。それは枝の付いた小さな棒で拵えた堀り具で掘る。採集するのは九月である。女性がユリ根を少し乾かし、シラカバ表皮の平底の大きい槽に入れ、冬中倉庫で保存する。ユリで調理するのは次のような料理である。（中略）クァルクモス　ユリ根を煮る。水を注ぎ、ユリ根を杵を使って槽の中で擦り潰す。アザラシの脂を注ぎ、また擦り潰す。次に前もって水に溶かしておいた白い粘土〈マミ〉を取って来る。粘土が底に沈殿すると、ニヴフのいう乳のように白い水が残るが、これを混ぜたものに注ぎ、それからもう一度擦り潰す。できた和物に漿果を加えて、水と一緒に混ぜる。この料理は魚の皮を煮て作る。モスという煮凝りのように凝固することはない。

とある。クレイノヴィチは、右の引用部分の注記に「残念ながら、ニヴフ族が食用としている植物は学問的見地からはこれまで明らかにされていない。私はその同定のために植物標本を蒐集しようと思ったが、これを実現できなかった」[18]と記している。したがってクレイノヴィチが言う「クァルク」というユリ根が、オオウバユリであるという確証はないのだが、調理に使われていることから、オオウバユリと見て良いのではないかと考える。またこれ以外の文献でニヴフの食物利用についての記述を調べても、「ユリの根など、草根も広く利用された。これの料理法は間宮林蔵の書いている通りである。『……其他草根、草實を合して、能々水煮し、魚油をそゝいで和物となす』。一部の植物の青葉、茎、苔類、海草類なども食用に供された」[19]とあり、あるいは「植物性の食品としてキク科植物の葉・茎、コケモモの実、ユリ

科植物の球根などをあるいはなまのままで、あるいは海獣の肉や脂肪をまぜて熱を加えて食べたりする」[20]とも記されている。以上のような記述によれば、ニヴフはユリの根をあえ物として調理していたようであり、粥としてはいなかったと思われる。クレイノヴィチの「クァルクモス」もあえ物と記されており、共通している。以上検討してきたように、サハリン島では、北海道とは調理法が違い、オオウバユリで粥を作ることはされていなかったようである。

また、オオウバユリをサハリンアイヌ語でどう呼んでいるのかについても確認してみよう。ドブロトゥヴォールスキーの『アイヌ語・ロシア語辞典』に見える「Turyep」が、オオウバユリを指すものと思われる[21]。また服部四郎編『アイヌ語方言辞典』を見ても、名寄・旭川・宗谷と千島の方言に、「turep」という用例がある程度であり[22]、粥などの関連する単語にも尭老和那（yo-ro-hwa-na）に近い語は見つけられなかった。ニヴフ語では先の「クァルク」というユリ根があげられるが、それ以上の調査は進んでいない。

このように、筆者は尭老和那（yo-ro-hwa-na）がオオウバユリだとする証拠をあげることができない。また筆者がサハリン島の先住民族の食生活やことばを調べた範囲では、尭老和那（yo-ro-hwa-na）という表現が、サハリンアイヌやニヴフとの関係で生まれたという可能性を指摘することはできなかった。

四、尭老和那についての仮説

すでに考察してきたように、尭老和那（yo-ro-hwa-na）がオオウバユリだとすれば、北海道アイヌ、サハリンアイヌ、ニヴフの食文化やことばをもとにした考察からは、なぜこう呼ぶのかという理由をあげることができない。そこで筆者は、北から南に発想の方向を変え、ひとつの仮説作業として日本語との関係を検討してみようと思う。

言語学者の新村出の指摘で広く知られているが[23]、安土桃山から江戸の初期にかけての日本語のハ行は、F音からH音への過渡期にあった。一六〇三年に刊行された『VOCABVLARIO DA LINGOA DE IAPAN（日葡辞書）』では、花はつぎのように記されている[24]。

Fana, Rosa, ou flor.

これは「ふぁな、バラ、または花。」ということになる。このように花は、一七世紀初頭には「ふぁな」と発音されていたことがわかる。筆者はそこで、尭老和那（yo-ro-hwa-na）の和那（hwa-na）も、日本語の花である可能性はないかと考えた。もしそうであるとすれば、尭老和那ということばは「ゆり（の）はな」と解釈すべきではなかろうか。あるいは、尭老（yo-ro）の部分だけはアイヌ語などの起源のことばで「ヨロ（の）はな」と考えるべきなのかもしれない。いずれも今後の検討課題としたい。

さて、一六九六年に、宗谷で日本語の単語を話すアイヌがいたということは、本当にありうることだったのかについて考えてみよう。

まず一七世紀を中心に、アイヌと和人との関係について概観しよう。一五五五年（もしくは一五五四年）の「夷狄の商船往還の法度」によって、蠣崎氏は知内と上ノ国という、東西のアイヌ首長の同意をとりつけ、交易関係の安定に成功した。それは松前に来航する諸国の商船から年俸を徴収し、その一部を両首長に渡すことによって実現した。その後、蠣崎慶広は豊臣政権に近づき、独立した大名としての地位を得た。豊臣秀吉の朱印状、およびこれに続く徳川家康の黒印状（黒印制書）の意味することについては、多くの説が発表されている。筆者は、黒印状が和人商人に対して、松前藩の許可を受けた者とアイヌは蝦夷地内に往復できることを示したとする考えに従いたい[25]。和人の対アイヌ交易は、松前城下における交易（城下交易制）が中心であり、一六世紀半ば以降、蠣崎（松前）氏はこの交易の管轄強化を一貫して目指していた。一六二〇年前後には城下交易が行われていたことが、ジェスイット教団の宣教師・アンジェリスらの報告によってわかる。その後一六三〇年代には、北海道各地に商場（場所）が置かれ始め、商場で交易が行われるようになる。商場には、松前藩主と藩士の商場

があった。一六六九年のシャクシャインの戦いの結果、鮭船・鱒船・鷹待・砂金掘りの派遣や刀剣の交易が禁止され、一つの商場に夏船を一艘しか派遣できないような制限がなされた。

松前藩主が置いた商場については、一八世紀初めの史料になるが、「松前蝦夷記」（一七一七年）に、「蝦夷地え志摩守手船年々商ニ差遣し候場所」とあり、イシカリ・ソウヤ・キイタップ・クスリ・アッケシ・ノッシャムの六ヶ所があげられる。鮭運上所から莫大な利益があったイシカリを除けば、いずれもサハリン島を経由しての山丹交易か千島列島との交易に関係のある商場である[26]。

以上見てきたように、城下交易制では松前で交易が行われていたのだから、松前に来たアイヌは、交易に際して日本語を用いていたであろう。また黒印状によっても、アイヌは自由に渡海できるとされていた。このように一七世紀の前半には、アイヌの人たちが日本語に接する可能性は残されていたと考えられる。また宗谷は、藩主の重要な商場とされていたから、多くの和人が渡っていったであろう。尭老和那（yo-ro-hwa-na）ということばの存在は、宗谷でのアイヌと和人とのコミュニケーションに、日本語が使われていたことの残滓とは考えられないだろうか。また李志恒たちの様子を見て、彼らを和人と誤解したアイヌの人たちが、敢えて日本語を使ったとも考えることができる。一方で李志恒は、金白善が日本語でアイヌの人たちに話しかけたが、全く通じなかったと記している。金白善の日本語を松前藩の侍たちは聞き取ることができたわけであるから、どのように考えるべきか疑問が残る。あるいは、金白善が話した日本語の方言の問題であろうか。

江戸時代の後期には、アイヌが日本語を習得することは、松前藩によって禁止された。しかし城下交易制、商場知行制、場所請負制の推移のなかで、アイヌによる日本語の使用については、もう少し細かく跡づけて考えるべきなのかもしれない。

おわりに

以上、李志恒『漂舟録』に見える尭老和那（yo-ro-hwa-na）について考察してきた。北海道アイヌ、サハリンアイヌ、ニヴフ、ウイルタなどの先住民族の食生活とことばで、オオウバユリがどのように記録されたのか、まだまだわかっていないことばかりである。今回は、一つの仮説を示すに留まったが、未解決の問題は、今後の課題としたい。

注

1 池内敏「李志恒『漂舟録』について」（『鳥取大学教養部紀要』第二八巻、一九九四年）。

2 池内敏「一七世紀、蝦夷地に漂着した朝鮮人」（朝尾直弘教授退官記念会編『日本国家の史的特質〈近代・近世〉』思文閣出版、一九九五年）。

3 中村和之「李志恒『漂舟録』にみえるアイヌ語について」（『北海道民族学』第三号、二〇〇七年）。

4 新谷は、「あらや」「しんや」「しんたに」などと読む可能性がある。現在の松前町には新谷（あらや）家があるので、本稿では「あらや」とする。松前町文化財保護審議会会長で、同町法幢寺東堂の木村清韶氏からご教示をいただいた。記して感謝申しあげる次第である。また、近刊の久保泰編『松前藩家臣名簿』私家版、二〇二一年、四二頁でも、あらやと読んでいる。同書の記述によれば、新谷十郎兵衛は新十郎とも言い、元禄九年五月には、「羽保呂金穿奉行　八人乗朝鮮船西蝦夷地連分志利嶋エ漂着之様子ヲ詮議」との記述がある。

5 gal-ak-do/gal-o-doの両方の可能性がある。なお韓国語はリエゾンがあるので、発音としては ga-rak-do/ga-ro-do になる。

6 新羽幌町史編纂委員会編『新羽幌町史』（羽幌町、二〇〇一年）二四二～二四三頁。

7 中村和之「李志恒『漂舟録』にみえる『羯悪島』について」（『史朋』第三九号、二〇〇七年）。

8 中村和之「李志恒『漂舟録』にみえる『石将浦』について」（『帯広百年記念館紀要』第二五号、二〇〇七年）。

9 （注1）池内同論文七九頁。

10 図2のオオウバユリの図は、福岡イト子『アイヌ植物誌』（風草館、一九九五年）九五頁、同じくカタクリの図は同書の八三頁より転載した。

11 萩中美枝ほか『聞き書 アイヌの食事』（『日本の食生活全集』四八、農山漁村文化協会、一九九二年）一九六～二〇一頁。

12 知里真志保『分類アイヌ語辞典植物編』（『知里真志保著作集』別巻I、平凡社、一九七六年「初出は一九五三年」）二〇三頁。

13 （注11）萩中ほか同書一八六頁。

14 （注12）知里同書一九六～二〇二頁。

15 （注12）知里同書二〇三頁。

16 大貫恵美子（坂口諒訳）『樺太アイヌ民族誌―その生活と世界観』（青土社、二〇二一年）五二頁。

17 E・A・クレイノヴィチ（枡本哲訳）『サハリン・アムール民族誌―ニヴフ族の生活と世界観―』（法政大学出版局、一九九三年）一〇一頁。

18 （注17）クレイノヴィチ同書三七三頁、注四一。

19 加藤九祚『北東アジア民族学史の研究』（恒文社、一九八六年）二一三頁。

20 服部健『服部健著作集―ギリヤーク研究論集―』（北海道出版企画センター、二〇〇〇年）四一頁。

21 M.M.ドブロトゥヴォールスキー（寺田吉孝・安田節彦訳）「M.M.ドブロトゥヴォールスキーのアイヌ語・ロシア語辞典（二〇）」（『北海学園大学学園論集』一七〇号、二〇一六年）一三九頁。

7880 *Turyep.*（名）ベリー． Mos. ユリ属．

—*kyem.*（名）赤いベリー（実）の果汁（染色用）．

22 服部四郎編『アイヌ語方言辞典』（岩波書店、一九六四年）九三、一一二、二〇四頁。

23 新村出「波行軽唇音沿革考」（『新村出全集』第四巻、筑摩書房、一九七一年「初出は一九二八年」）。同「国語に於けるFH両音の過渡期」（『新村出全集』第四巻、筑摩書房、一九七一年「初出は一九二九年）。

24 土井忠生解題『日葡辞書』（岩波書店、一九六〇年）一五五頁、右段の四〇行目。

25 鶴田啓「一七世紀の松前藩と蝦夷地」（藤田覚編『十七世紀の日本と東アジア』山川出版社、二〇〇〇年）。

26 菊池勇夫「交易と境界をめぐって―一七～一九世紀の環オホーツク海―」（『環オホーツク 第三回環オホーツク海文化のつどい報告書 一九九五 No.3』北の文化シンポジウム実行委員会、一九九六年）二一頁。

〔謝辞〕

韓国語のローマナイズや発音などについては、大韓民国・東国大学校文化学術院・HK教授のイム＝ギョンジュン（林慶俊）氏、ならびに国立アイヌ民族博物館・エデュケーターのシン＝ウォンジ（辛沅知）氏から懇切なご教示を受けました。心より感謝申しあげます。

また本研究は、JSPS科研費 JP20H01306の助成を受けたものです。

（函館工業高等専門学校特命教授）

令和３年度北海道教育大学函館人文学会幹事
代　表　　孔　　麗
幹　事　　有井　晴香
　　石井　　洋
　　奥平　　理
　　古地順一郎

令和３年度「人文論究」編集委員
　　杉浦　清志（委員長）
　　佐々木　馨
　　畠山　　大
　　羽根田秀実

人文論究　第91号
令和4年2月28日　印刷発行

編集・発行　　北海道教育大学函館人文学会
　　〒040-8567 北海道函館市八幡町1－2
　　北海道教育大学函館校内
代　表　者　　孔　　麗
印　刷　所　　㈲三和印刷
　　〒040-0061 北海道函館市海岸町8－11

JINBUN-RONKYU

Journal of the Society of Liberal Arts
No. 91 February 28, 2022

Yoshinobu ENDO
SHIROMARU Fumio's Conception of the Pedagogics in 1946 ····· (1)

Li KONG
Restricting factors on the transition from Technical Intern Training to Specified Skilled Worker (i)
-Considerations from the Survey Results of Supervising Organizations and Registered
Support Organizations in All-Hokkaido- ····· (17)

Yoshiya GOTO
Concern for the World: Heidegger and Arendt ····· (27)

Nobuhiro KISHIGAMI
Socio-cultural Change among Urban Inuit in Canada: A Case of Montreal ····· (37)

Ko TOMARI
The Prehistory of Chinese Northern Frontier Poetry in Ezo: Exchange of Poems between
Shaku Chijun（釈智潤）, the Monk of Matsumae Aun Temple and Lee Ji-Hang（李志恒）,
a Korean Official Drifting to Japan on a Ship in the Genroku Era ····· (一)

Kazuyuki NAKAMURA
On a plant name found in *Pyojurok*（漂舟録）, the drifting boat records of Lee Ji-Hang（李志恒） ····· (一一)

Published by JINBUN-GAKKAI
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION, HAKODATE CAMPUS
Hakodate, Hokkaido, Japan